

10月31日は宗教改革記念日だが、ハロウィンの祭りでもあるらしい。ハロウィンは、世に死者が戻るこの日に諸悪霊も一緒にやって来る、という欧州人の古層にある宗教観。

当時のカトリック教会にとっては、ハロウィンの悪霊よりも、宗教改革が唱える万人祭司や聖書の原典解釈の方が、遙かにやっかいな怪物であった。怪物M.ルターは、同志のメランヒトンに興味深い手紙を書いている。

「神はつくりものの罪人を救い給わない。罪人でありなさい、大胆に罪を犯しなさい。しかしもっと大胆にキリストを信じ喜びなさい。大胆に祈りなさい、もっとも大胆な罪人になりなさい(1521年)」。

パウロは「わたしは自分のしていることが分らない。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするから(コリ 7:15)」と嘆いているが、私たちはどうか。「自分のしていることが分らない」のは自明なことで、嘆くこともなく、所詮人間とは弱く愚かな者だ、と開き直ってしまうだろうか。

ルターはそんな人間の虚無を見つめ、愛する同志に「もっとも大胆な罪人になれ」と逆説的に迫る。

「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じている。あなたはどうかお考えか(ヨハネ 8:5)」と信仰の権威者が罫を仕掛ける(8:6)。扇動する権威者ばかりか民衆も取り囲んでいる。民衆はイエスに教えを乞うためにやって来た求道的な人たちで(8:2)、ユダヤ男子として律法にも通じている。だから女が石打ち刑で処刑されることは、妥当な「義」だと思っている。

するとイエスは「かがみ込み、指で地面に何かを書き始められた(8:6)」。これがイエスの最初の答え。だが誰もそれに気づかない。

イエスの静かなまなざしと無関心な態度。それと対照的なのが、信仰権威者らのヌラヌラした底意ある眼付。騒動にときめく民衆は、処刑を期待するサディスティックな悪意を自覚していない。

「しかし彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。[あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい] (8:7)」。民衆は啞然となって互いに顔を見合わせる。

ルターは手紙に「罪人でありなさい、大胆に罪を犯しなさい」と書いたが、この時、民衆は自分が罪人であることに「出会った」。「自分のしていることが分らない(コリ 7:15)」状態から、罪を犯している己を自覚したのだ。だから「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去った(ヨハネ 8:9)」。

人々はイエスのひと言で己が罪と衝突し、立ち去った。ただルターが書いた「しかしもっと大胆にキリストを信じ、喜びなさい。大胆に祈りなさい」のきっかけを得ぬままの退場。生きるとは罪を犯すことかもしれないが、それが赦されて、大胆に信じ、喜ぶことを欠いたまま退場した。

ひと悶着の後、神殿の境内には「イエスひとり、真ん中にいた女が残った(8:9)」。そして女だけがイエスの赦しの言葉を聞く。

「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい(8:11)」。「わたしも」記されているが、権威者の裁きの断念と、イエスが「罪に定めない」ことはまったく違う。イエスの赦しの言葉には、十字架で女の罪を肩代わりする決意が響いている。

民衆は己が罪を恥じ入って終いだが、女には「もっと大胆にキリストを信じ、喜びなさい(ルター)」へと転換する可能性が開かれる。



《おまけのひとこと》

主は恵み深く正しくいまし罪人に道を示してください(詩編 25:8) 道はこの足許から始まっている
つまり己が罪を知る所から 歩きづらいが一服してもよい この道で自分の生き方・死に方を学ぶ